

日本考古学における動物遺体研究史

—動物との関わりにみる日本列島の文化の形成—

金子 浩昌

-
- | | |
|----------------------------|------------------------------|
| 序 | 7. 直良信夫による動物遺体の研究 |
| 1. モースとそれ以後1900年以前の貝塚動物の研究 | 8. 東京湾沿岸域における貝塚の研究 |
| 2. 遺跡出土の獸魚骨、石器時代漁撈の研究(1) | 9. 酒詰仲男による貝塚の研究 |
| 3. 動物学者による動物遺体の研究 | 10. 大給尹による動物遺体特体特に魚類骨についての研究 |
| 4. 石器時代漁撈の研究(2) | 11. 貝塚産貝類・獸類の研究 |
| 5. 松本彦七郎らの貝塚獸骨の研究 | 12. 収束 |
| 6. 長谷部言人による動物遺骸の研究 | おわりに |
-

論文要旨

日本の考古学は1877年来日したアメリカ人 Edward S. Morse の大森貝塚の発見とその発掘からはじまると言われている。Morse は動物学者であったから、貝塚の貝に興味を持った（本当に腕足類の殻もほしかったのではなかろうか）。幸い、*Anadara granosa* Linne が貝塚に多産して、現在の大森海岸に生息しないことをつきとめた。これは貝塚の形成がはるかな昔にさかがぼる唯一の有力な証拠となつたが、彼はさらにその貝の放射肋数を現生貝と比較しようとしたが、思うように資料が集まらなかつた。他の魚・獸骨は種名を列記する以上のことは何もしなかつた。むしろ、彼ははじめてみる美術的な縄文土器にひかれた。モースの帰国後、貝塚に関心をもつた研究者がいた。後に地理学や地質学に進む人物のいたことは幸いだった。貝塚貝類の図譜も1895年には出来た。動物学教室の若い研究者が貝塚の骨類を同定し、報告した。その頃、松本彦七郎、長谷部言人、少しおくれて直良信夫が主として獸骨を研究の対象にした。松本、直良は化石哺乳動物学から、長谷部は形質人類学の応用からであった。もっとも考古学に近かつたのは直良であった。大山柏、甲野勇、八幡一郎らは編年的研究を進める間に貝塚の貝種組成に変化があることに気付いたが、魚・鳥・獸骨を資料として考えることは極めて限られた範囲で試みただけであった。酒詰仲男は考古学から貝塚とその貝を徹底的にみようとした一人であった。しかし酒詰の場合も基本的には化石貝類の研究方法が使われている。魚・獸骨については種名が同定されればよいと考えていた。大山桂は貝類学の立場から貝塚貝類の分類を行つた。考古学者の立場で扱おうとした人に大給尹がいる。魚骨のみで終わった。貝塚の研究がようやく軌道に乗るようになったとき、研究の拠点となつてゐた大山史前学研究所は戦災ですべてを失い、直良のいた獸類化石研究室もまた焼失する。